

源氏の兵ども、すでに平家の舟に乗り移りければ、  
 水手梶取ども、射殺され、斬り殺されて、舟をなほすに  
 及ばず、舟底にたはれふしにけり。新中納言知盛卿、少  
 舟に乗って御所の御舟に参り、「世のなかは今のかうと  
 見えて候ふ。見苦しからん物ども、みな海へ入れさせ給  
 へ」とて、艫舳ともへに走りまはり、掃いたりのごうたり、塵拾  
 ひ、手づから掃除せられけり。女房達、「中納言殿、いく  
 さはいかにやいかに」と口々に問ひ給へば、「めづらし  
 きあづま男をこそ御覧ぜられ候はんずらめ」とて、から  
 からと笑ひ給へば、「なんでうのただいまのたはぶれぞ  
 や」とて、声々にをめきさけび給ひけり。

二位殿はこの有様を御覧じて、日ごろおぼしめしま  
 けたる事なれば、鈍色の二衣うちかづき、練袴ねりばかまのそば  
 たかくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主  
 上をいだき奉って、「わが身は女なりとも、かたきの手に  
 はかかるまじ。君の御供に参るなり。御心ざし思ひ参ら  
 せ給はん人々は、いそぎつづき給へ」とて、船端ふなばたへあゆ  
 み出でられけり。主上今年は八歳にならせ給へども、御  
 としの程よりはるかにねびさせ給ひて、御かたちうつくし  
 く、あたりも照りかかやくばかりなり。御ぐし黒うゆらゆら  
 として、御せなか過ぎさせ給へり。あきれたる御様にて、  
 「尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかむとするぞ」と仰  
 せければ、いとけなき君におかひ奉り、涙をおさへて申  
 されけるは、「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先  
 世じゅうぜんかいぎやうの十善戒行の御力によって、いま万乗の主と生れさ  
 せ給へども、悪縁にひかれて、御運すでにつきさせ給ひ  
 ぬ。まづ東におかはせ給ひて、伊勢大神宮御暇申させ  
 給ひ、その後西方浄土さいほうじょうどの来迎にあづからむとおぼしめ  
 し、西におかはせ給ひて御念仏さぶらふべし。この国は  
 粟散辺地そくさんへんちとて心憂きさかひにてさぶらへば、極楽浄土と  
 てめでたき処へ具し参らせさぶらふぞ」と泣く泣く申さ  
 せ給ひければ、山鳩色の御衣ぎよいにびんづら結はせ給ひ  
 て、御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、ま  
 づ東をふしをがみ、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、そ  
 の後西におかはせ給ひて、御念仏ありしかば、

源氏の武士たちは、すでに平家の舟に乗り移ったので、  
 水手梶取たちは、射殺され、斬り殺されて、舟の向きをな  
 おすことができず、舟底に倒れ横たわった。新中納言知盛卿  
 は、小舟に乗って帝がお乗りになっている船に行き、「戦況は  
 もはやここまでと思われます。見苦しいものは、みんな海に  
 捨ててください」と言っ、舳先から船尾へと走りまわり、掃  
 いたり拭ったり、塵を拾い、手づから掃除した。女房たちが  
 「中納言殿、戦さはどう？ どうなの？」と口々に尋ねるので、  
 「めつたに見られないあづま男をご覧になれますよ」と言っ  
 てからからと笑ったので、「なんてひどい冗談なの」と声々に  
 わめき叫んだ。

二位殿はこの有様をごらんになって、ここ数日考えておられ  
 たことなので、鈍色の二枚重ねた着物を頭からかぶり、練袴  
 の脇の部分をとくし上げて腰紐にはさみ、神璽を脇にはさ  
 み、宝剣を腰にさし、帝をお抱きして、「わたくしは女であつ  
 ても、敵の手にかかるつもりはない。君のお供をいたします。わ  
 れもとお思ひの方々は、いそいで続きなさい」と、船端に歩い  
 ていった。帝は今年8歳におなりだが、お年よりもずっとしつ  
 かりしておられて、顔かたちもかわいらしく、あたりが照りかが  
 やくほどだった。髪が黒くてゆらゆらとして、長さは背中をこえ  
 ていた。不思議そうなご様子で、「おばあさま、私をどこへ連  
 れてゆくのか」とおっしゃったので、おさない帝にむかって、涙をお  
 さえて言うには、「帝はまだご存じではありませんか。前世の  
 十善戒行じゅうぜんかいぎやうのお力によって、現世では万乗の主（帝）として  
 お生まれになりましたが、悪縁にひかれて、御運はすでに尽き  
 てしまいました。まず東にむかって、伊勢大神宮にお暇を申し  
 あげ、その後西方浄土さいほうじょうどからお迎えに来ていただくようお願い  
 になって、西に向かつて念仏をとえなさいませ。この国は  
 粟散辺地そくさんへんちというつらいところでございますので、極楽浄土とい  
 うすばらしいところへお連れいたしましうね」と泣く泣く申し上  
 げたので、山鳩色のお召し物にびんづらを結って、涙を流し  
 て、小さくかわいらしい手をあわせ、まず東を拜んで、伊勢大  
 神宮にお暇を申し上げ、その後西に向かつて、念仏をおとな  
 えになったので、

二位殿やがていただき奉り、「浪の下にも都のさぶらふぞ」となぐさめ奉って、千尋の底へぞ入り給ふ。

悲しき哉、無常の春の風、忽ちに花の御すがたを散らし、なさけなきかな、分段のあらき浪、玉体を沈め奉る。殿をば長生と名づけてながきすみかとさだめ、門をば不老と号して老せぬとざしとかきたれども、いまだ十歳のうちにして、底の水屑じゅうぜんていとならせ給ふ。十善帝位の御果報申すもなかなかおろかなり。雲上の竜くだって海底の魚となり給ふ。大梵高台だいぼんこうだいの閣の上、釈提喜見しゃくだいきけんの宮の内、いにしへは槐門棘路かいもんきやくろの間に九族をなびかし、今は舟のうち浪の下に、御命を一時いっしに滅ぼし給ふこそ悲しけれ。

二位殿はそのままお抱きし、「浪の下にも都がございますよ」とおなぐさめして、千尋の底へお入りになった。

悲しいことだ、無常の春の風が、たちまち花のような御すがたを散らし、嘆かわしいことだ、分段の荒波がおからだを沈めた。殿舎を長生と名づけて“ながきすみか”とさだめ、門を不老と呼んで“老せぬとざし”と書いたけれど、まだ 10 歳にならないうちに、底の水屑じゅうぜんていとなられた。十善帝位じゅうぜんていにあった方の運命かと思えばとても言葉にならない。雲上の竜くだって海底の魚となる。大梵高台だいぼんこうだいの閣の上、釈提喜見しゃくだいきけんの宮の内、かつては槐門棘路かいもんきやくろの間に九族をなびかせ、今は舟のうち浪の下に、御命がたちまち失われたことが悲しい。